

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 6 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520499

研究課題名（和文） 非選択目的語の使用における文法の創造性

研究課題名（英文） On the Creativity of Grammar in the Use of Unselected Objects

研究代表者

鈴木 亨（SUZUKI Toru）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：70216414

研究成果の概要（和文）：

結果構文など英語の非選択目的語が関わる構文は、その構文的イディオム性をもとに文脈に応じて多様かつ新奇な創造的表現の使用を支える文法的基盤となっている。本研究は、非選択目的語が関与する構文に通底する変化事象を表す文法のしくみを明らかにするとともに、統語論と意味論という狭義の文法のみならず、世界知識や文脈情報など語用論的要素が創造的な言語表現の認可に関与するしかたを含めて、言語使用における文法の創造性の一端を解明した。

研究成果の概要（英文）：

Several related constructions with unselected objects including the resultative construction function as the grammatical basis of creating novel expressions interacting with diverse contexts. This study identifies the grammatical mechanisms shared by those relevant constructions with unselected objects focusing on the interpretation of change events in particular. Furthermore, some aspects of grammar in creative language use are explored with reference to pragmatic factors such as world knowledge and contextual information beyond narrow grammar, i.e., syntax and semantics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：文法、非選択目的語、結果構文、意味解釈、創造性

1. 研究開始当初の背景

近年の結果構文をめぐる研究が明らかにしたことは、結果構文には、①動詞の語彙情報に依存して構文が定まるトップダウン型

(e.g., He broke the dish in pieces./She froze the ice cream hard.) と、②動詞の語彙情報からは独立に、むしろ変化を表す結果句を中核とする小節 (small clause) 構造

を基盤として非選択目的語 (unselected objects) が導入され、動詞があとづけ的に加えられるボトムアップ型 (e. g., They drank the pub dry. /We laughed ourselves sick.) の2種類があるということである (Washio 1997、Mateu 2002、Broccias 2003、Wechsler 2005、小野 2007、Suzuki 2007 他)。ボトムアップ型は、非選択目的語の導入を伴う点で、いわゆる構文イディオムとの共通性が指摘されている (Goldberg & Jackendoff 2004)。つまり、非選択目的語に関わる構文は、その構文イディオム性をもとに、文脈に応じた多様かつ新奇な創造的表現の使用、すなわち発話の創造性を支えるという役割を担っている。従来の研究で各種構文の個別の特性はある程度明らかにされてきたが、それらの研究知見を統合し、そこに通底する文法メカニズムを一般化し、人間の言語使用における創造性を解明する手がかりとして位置づけるような研究はいまだ手薄であると言わざるをえない。

2. 研究の目的

本研究は、結果構文をはじめとする英語の関連構文 (使役移動構文、way構文等) において見られる「非選択目的語 (動詞の語彙情報に基づく選択に直接依存しない目的語)」を認可する英語の文法メカニズムを解明し、いわゆる1度限り (one shot) の特殊用例も含めて、創造的な言語使用において文法が果たす役割について、統語論・意味論のみならず、語用論的視点も含めて理論的に考察する。

3. 研究の方法

本研究は、主に結果構文関連の研究知見を基礎として、非選択目的語のかかわる文法現象に関して、狭義の文法 (統語論・意味論) が、創造的発話表現において具体的にどのような役割を果たすのかを解明するため、関連分野の研究文献を収集・分析するとともに、各種のテキスト資料 (インターネット、デジタルテキスト、コーパス等) を精査することにより、一般的なアクセスが必ずしも容易ではない非選択目的語の使用事例を効率的かつ多面的に収集・データベース化し、言語使用の創造性における文法の役割に関する説

明的な理論の構築に役立てる。

4. 研究成果

(1) 心理インパクト動詞における非選択目的語を伴う拡張用法:

動詞 frighten に代表される心理インパクト動詞 (verbs of psychological impact) において見られる非選択目的語の認可とそれに伴う本来の目的語のPP内への降格 (e. g., He frightened the hiccups out of her.) のメカニズムについて、関連する表面接触動詞 (e. g., He wiped the crumbs off the table. /He kissed these questions from her lips.) や状態変化動詞 (e. g., He melted the handle off the coffee pot. /She broke a leg off the table.) と比較しつつ、Ramchand (2008) の First Phase Syntax の枠組みを用いて分析した。

First Phase Syntax は、動詞の語彙意味と統語構造のインターフェイスとしての事象構造における一般化を捉えるシステムである。そこにおける動詞の潜在的な多義的用法を説明するメカニズム「不完全連結 (underassociation)」を補完するため、2つの機能的制約として、「項の共有 (argument sharing)」と「非顕在項の認可 (licensing of implicit arguments)」を提案した。これにより、心理インパクト動詞における非選択目的語構文への生産的な拡張用法の構造的基盤を定式化できる。

心理インパクト動詞は、非選択目的語を伴う拡張用法を許す典型的な動詞類であり、この分析における文法的認可のしくみは、その他の表面接触動詞や状態変化動詞の類の分析にも応用可能であり、なぜ非選択目的語を伴う拡張用法が、他動詞一般ではなく、特定の動詞類に限定されるのかを説明する上で、有力な理論的道具立てとなることが期待される。

(2) 複合的变化事象における状態変化と位置変化の両立:

場所理論 (localist theory) に基づく唯一経路制約 (Unique Path Constraint: Goldberg 1995) に従い、単文内では一般に両立しないとされる状態変化と位置変化が両立していると思われる複合的变化事象の

代表的事例として、「内部移動の結果構文(岩田 2010)」(e.g., She slid the window shut./He dropped his mouth open.)、「状態変化動詞を伴う非選択目的語結果構文(鈴木 2011)」(e.g., She melted the ice cream into the bowl./He scared the secret out of her.)、「見せかけの結果構文(Washio 1997, Suzuki 2007)」(e.g., She piled the books high up to the ceiling./She chopped the parsley fine into a bowl.)の3つを取り上げ、構文的な共通点として、状態変化と位置変化をそれぞれ表す述語(動詞と結果句)が、「部分と全体(part/whole)」、あるいは「図と地(figure/ground)」という関係に基づく変化主体の再解釈に応じて、関連づけはあるが異なる叙述対象を持つことを明らかにした。

単文内で状態変化と位置変化が両立するには、変化主体に関して、世界知識に基づく内在的、もしくは文脈依存的な内部構造に基づく「部分と全体」あるいは「図と地」という概念上の再解釈が前提条件となっている。必ずしも統語構造上の項として顕在化するわけではない「部分(part)」または「図(figure)」に対して、結果句が叙述的解釈を持つということが、統語論と意味論の文法インターフェイスにおいてどのような理論的意味合いを持つのかについては、さらに検討する必要がある。

(3) 非選択目的語の認可における「世界知識」と「文脈情報」の関与:

位置変化あるいは状態変化という変件事象を内在化する構文表現において非選択目的語が導入される、いわゆる新奇な創造的事例における意味解釈の条件について考察した。

動詞のタイプ別(結果含意他動詞、非能格他動詞、非能格自動詞)に、非選択目的語が生じた場合の適切な事象解釈のしくみを検討する上で、まず非選択目的語の認可に関与する「世界知識(world knowledge)」と「文脈情報(contextual information)」の働きを区別した(Pustejovsky 1995)。

結果含意他動詞の場合(e.g., He frightened the hiccups out of her./She melted the handle off the coffee pot.)には、「世界知識」に基づく変化主体の部分と全

体の関係性が解釈の中心的な役割を果たすのに対して、非能格動詞の場合(e.g., He kissed her questions from her lips./The neighbor's dog barked me awake.)には、「世界知識」も関与するが、むしろ個別場面における近接物としての関係性を特定するための「文脈情報」の方が適切な解釈にとって不可欠であることを、具体的な個別事例の分析に基づいて明らかにした。

(4) 今後の展望:

本研究では、結果構文を中心とする関連構文において、非選択目的語が統語論と意味論のインターフェイスで認可される文法上の基盤を解明するとともに、新奇ないわゆる創造的言語表現の分析においては、狭義の文法(統語論、意味論)だけでなく、世界知識や文脈情報など語用論的要素の関与を含めて考察することが有効かつ不可欠であることを明らかにした。これらの知見は、今後言語使用における文法の制約性と創造性の相互作用を理論的に解明していくための基盤的な手がかりとして位置づけることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

① 鈴木亨「変件事象における非選択目的語の意味解釈のしくみ」, 『山形大学人文学部研究年報』第9号, 査読有, 2012年, 153-169.

Downloadable from:
www-h.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/pdf/nenpou9_08.pdf

② 鈴木亨「複合的変件事象の意味論に向けて-状態変化と位置変化が両立するとき」, 『山形大学人文学部研究年報』第8号, 査読有, 2011年, 19-37.

Downloadable from:
www-h.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/pdf/nenpou8_02.pdf

③ 鈴木亨「項の共有と非顕在項の認可-心理インパクト動詞を伴う非選択目的語結果構文」, 『山形大学人文学部研究年報』第7号, 査読有, 2010年, 1-22.

Downloadable from:
<http://repo.lib.yamagata-u.ac.jp/handle/123456789/6692>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 亨 (SUZUKI Toru)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：70216414